

## 源氏物語の叙述体の翻訳における問題

Sonja ARNTZEN

今回の発表にこのようなテーマを選んだ動機は、アーサー・ウェリー氏が英訳された源氏物語の中の一つの間違いに気がついたことがきっかけとなりました。

源氏物語の英訳にはサイデステッカー氏が訳された作品もあり、一般的には彼の訳の方がオリジナル作品に忠実だと言われています。しかし、ウェリー氏の中のその一つの間違い、いわゆる誤訳の一つに気がついたときに、ウェリー氏が犯した翻訳ミスの方がサイデステッカー氏の正しいと言われる訳よりも、作者紫式部の意図に沿っているのではないかと考えるようになりました。なぜ、このような考えにたどり着いたのかは後ほど詳しく説明しますが、まず最初にこの問題にも関わってくる、源氏物語の翻訳において考えなければならない、重要な問題点について述べたいと思います。

それは源氏物語の特殊性の一つと思われる叙述体——日本語で言えば地の文、英語でいえばナレーション——を翻訳する際に起こるもので、これは、現代日本語訳においても難しい問題であり、ましてや外国語訳においては極めて困難な問題と言えましょう。ここで、前もってお断りしておきますが、この発表では、叙述体の中に含まれる、いわゆる草子地（語り手が直接読者に意見を述べたり、感想を漏らしたりするところ）については、考察の対象外したいと思います。なぜならば、草子地を翻訳する際には、これから述べるような問題はあまり起こらないと思うからです。私が考察の対象として考えているのは、作中人物の心内語と地の文の間を行きつ戻りつしつつ滑らかに流れる、源氏物語

独特の叙述体——あるいは源氏物語に限らず平安時代の女流作品に独特の、と言った方が正確かもしれませんが——、ともかくそのような叙述体のことなのです。この叙述体の問題点の一つは敬語の使い方です。現代日本語訳においても、現代語にふさわしい敬語を選択することは容易なことではないのですが、英訳の場合は、英語に敬語そのものが存在しないので、ことばの選択の問題はますます困難になります。

実は、ご承知のように、源氏物語における敬語についての、国語学、国文学の研究は質、量ともに膨大なものがあり、私のような専門知識の乏しい者には触れるのも恐ろしい話題です。しかし、ご批判をいただくのは覚悟の上で、というよりも、適切なコメントとアドバイスをいただきたく、次のような仮説を提供したいと思います。

まず、源氏物語における敬語現象を理解するための視点の一つは、語り手、読者、登場人物の間に存在する一種の三角関係に注目することではないでしょうか。すなわち、源氏物語の中の敬語の機能の一つは、一種の信号として語り手と読者を密接に結びつけることではないかと思うのです。この結びつきによって、テキストが生き生きとしたものになっているのではないのでしょうか。源氏物語において、語り手の存在は重要な意味をもっています。敬語の使い方は、その語り手の存在の重要性を明らかにしてくれます。原文の地の文において、語り手は読者に語り手の身分に相応する敬語のレベルを伝えています。この敬語のレベルは、作者の実際の社会的身分にもっともふさわしいものが使われています。平安時代に、紫式部は、女性作家として、自分とほぼ同じ身分の語り手を通して、大体同じ経験を持つ女房達である読者に話しているわけです。これは、きわめて特殊な場所と状況の中におけるコミュニケーションであるといえましょう。したがって、この特殊性を持つ叙述体を翻訳することは、大変難しいことと言わねばなりません。

さて、ここで、この発表のきっかけとなった英訳の話題に戻りたいと思います。これは数年前に起こった出来事です。私が教えていた古典の女性文学のク

ラスの中に女性学専攻の学生が三人いました。このクラスでは、日本の古典文学を英訳で読みます。そのクラスの中で三人の女性学専攻の学生が協力して源氏物語について発表することになりました。その準備のために、三人はまず、サイデンステッカー氏の英訳で源氏物語を読んだのですが、若紫巻にある、光源氏がまだ幼い若紫の帳台の中に入り込む場面にとてもショックを受けたのです。彼女たちにはその場面の源氏がほとんど変態のように見えたそうです。優雅で美しい貴族の物語と思って読んでいた彼女たちにとって、それは思いがけない場面であったわけです。先にも述べたごとく、彼女たちは、まず、サイデンステッカー氏の訳を読んで、そのような印象を受けたのですが、その後、ウェリー訳を調べた時に、ますます源氏の変態性の印象が強くなってきました。もしかしたら、翻訳のせいでそのような印象を受けてしまうのかもしれないと考えた三人は、私のところに源氏物語の原文を確かめてもらいにやって来ました。

まず、二つの英訳におけるその箇所を紹介します。

**Edward G. Seidensticker, The Tale of Genji. New York: Alfred A. Knopf, 1976, 104頁**

Quite as if he belonged there, he slipped into the girl's bedroom. The women were astounded, Shonagon more than the rest. He must be mad! But she was in no position to protest. Genji pulled a singlet over the girl, who was trembling like a leaf. Yes, he had to admit that his behavior must seem odd; but trying very hard not to frighten her, he talked of things he thought would interest her. "You must come to my house. I have all sorts of pictures, and there are dolls for you to play with." She was less frightened than as first, but she still could not sleep.

…and so saying, as though it were the most natural thing in the world, he picked up the child in his arms and carried her to her bed. The gentlewomen were far too astonished and confounded to budge from their seats; while Shonagon, though his high-handed proceeding greatly agitated and alarmed her, had to confess to herself that there was no real reason to interfere, and could only sit moaning in her corner. The little girl was at first terribly frightened. She did not know what he was going to do with her and shuddered violently. Even the feel of his delicate, cool skin when he drew her to him, gave her goose-flesh. He saw this; but none the less he began gently and carefully to remove her outer garments, and laid her down. Then, though he knew quite well that she was still frightened of him, he began talking to her softly and tenderly: ‘How would you like to come with me one day to a place where there are lots of lovely pictures and dolls and toys?’ And he went on to speak so feelingly of all the things she was most interested in that soon she felt almost at home with him. But for a long while she was restless and did not go properly to sleep.

ごらんのように、サイデンステッカー氏の訳には、「肌」 skinということばが出てきません。一方、ウェリー氏の訳には、源氏の肌に触れてぞっとしている幼女に源氏がますます魅せられていく様子がじつにきわどく描かれている箇所があります。あとで詳しく述べるつもりですが、実は、この箇所の訳こそ、冒頭に触れた間違い、すなわち誤訳なのですが……。

ところで、原文の方はどうなっているのでしょうか。



とて、いと馴れ顔に御帳の内に入りたまへば、あやしう思ひの外にも、とあきれて、誰も誰もみたり。乳母は、うしろめたうわりなしと思へど、荒らましよう聞こえ騒ぐべきならねば、うち嘆きつつみたり。若君は、いと恐ろしう、いかならんとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、らうたくおほえて、単衣ばかりを押しくくみて、わが御心地も、かつは、うたておほえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と、心につくべきことをのたまふけはひの、いとなつかしきを、幼き心地にも、いとう怖ぢず、さすがにむつかしう、寝も入らずおほえて、身じろき臥したまへり

源氏の思いがけない振舞いに女房たちが呆れている様子がよく描かれています。乳母もどうすることもできず、心配と恐れから、そばに控えたまま、ため息をつくばかりです。この箇所では敬語は使われていないので、語り手と作中人物の女房たちと平安時代の女房である読者の、三者の間の隔たりがほとんど無くなります。これは前に指摘した三角関係によるものといえましょう。この後の長い文章は、源氏物語独特の文章で、地の文から心内語へと流動する、もともよい例の一つです。若紫の恐怖と不安を彼女の体を通して表わしています。源氏は若紫の「肌つき」を見て、「ろうたくおほえ」た自分に少しとまどい、幼女の気持ちに心を配りつつ、安心させようと努めます。やはり、この場面で「肌」という言葉は重要な意味をもっています。すなわち、肌への言及が若紫と源氏の意識の境界線になっていると思えます。

ところで、ウェリー氏は、この場面をどのように誤解したのでしょうか。

「御肌」の敬語を源氏に対しての尊敬語と考えて、この場面の「肌」という言葉が源氏の肌と解釈してしまったようです。さらに「肌つき」の「つき」を見かけではなくて、「肌ざわり」の意味と間違えました。サイデンステッカー氏の訳にはこのような間違いはありませんが、この場面で重要な意味を持つと思われる「肌」への言及はありません。ごらんのように、“Genji pulled a singlet over the girl, who was trembling like a leaf.”と簡単な文章になっており、原文の「いとつづくしき御はだつきも、そぞろ寒げに思したるを、らうたくおぼえて」の部分は省略されてしまっています。その意味では、少なくとも、この箇所は原文に忠実とは言えません。身体の描写は源氏物語にはまれなものであり、しかし、それが描かれているときはそれは文章のなかでも特別に際立って強い印象を与えるものと思われます。ここも同様で、幼女と大人の男の関係の描写にエロチックなニュアンスがあるために、この場面は読者に異様なおもえるほどの強い印象を与えます。女房たちや乳母の反応から推測しても、源氏の行為が当時の社会の常識から見ても意外な、また、心外なものであることがわかります。若紫の恐怖も自然なものだったでしょう。若紫は藤壺の身代わりということからも、この場面の裏には、源氏のもっとも暗く、激しい不義の恋愛も暗示されています。そして、この場面にはまた一層複雑な情念も隠されています。紫のゆかりをもっと遡れば、源氏の母の喪失が見えてきます。その悲しい宿命は源氏の満たされない欲望の出発点なのです。この場面で源氏はふるえている若紫を「ろうたく」覚えると共に、一方ではまた、自分の行動や思いを「うたて」と心の内に感じますが、ここで読者も「当然だ」とうなずいてしまうでしょう。私のクラスの三人の学生たちがショックを受けたのも無理からぬことです。

では、日本語の現代語訳では、この場面をどのように扱っているのでしょうか。ここでは、この約百年間に刊行された四人の有名な作家の現代語訳を検討してみます。年代順に、與謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、瀬戸内寂聴の各氏の

訳を追っていきたいと思います。

與謝野晶子「全訳源氏物語・上」角川文庫851、角川書店、昭和46年、176-177頁

と言って、馴れたことのように女王さんを帳台の中へ抱いてはいった。だれもだれも意外なことにあきれていた。乳母は心配をしながらも普通の闖入者を扱うようにはできぬ相手に歎息をしながら控えていた。小女王は恐ろしがってどうするのかと怯えているので肌も毛穴が立っている。かわいく思う源氏はささやかな異性を単衣に巻きくんで、それだけを隔てに寄り添っていた。この所作がわれながら是認しがたいものとは思いつつも愛情をこめていろいろと話していた。

「ねえ、いらっしゃいよ、おもしろい絵がたくさんある家で、お雛様遊びなんかのよくできる私の家へね」

こんなふうには小さい人の気に入るような話をしてくれる源氏の柔らかい調子に、姫君は恐ろしさから次第に解放されていった。しかし不気味であることは忘れずに、眠り入ることはなくて身じろぎしながら寝ていた。

まず、與謝野晶子氏の訳において注目すべきことは、地の文に敬語を使っていないことです。このため、この訳は初期の訳であるにもかかわらず、最も外国語訳に近いものになっています。西洋の小説の全知的な地の文とほとんど同じです。しかし、そうすると語り手と作中人物の女房たちとの親密な関係が見えなくなります。さらに原文の長い文章を短く切って、若紫の恐怖を外側から、つまり客観的に述べているので、それが幼女と大人の男性の心理の対象を弱めてしまっていると思われる。

與謝野訳とは対照的に、谷崎潤一郎氏の訳は原文に近いものになっています。

谷崎潤一郎「新々訳源氏物語」谷崎潤一郎全集27、中央公論社、昭和58年、  
194頁

と、たいそう馴れ馴れしく御帳のうちへ抱いておはいりになりますので、思いのほかな、怪しいことをなさるものよと、誰も誰も呆れているのでした。乳母も困って、気を揉んでいるのですけれども、はしたなく騒ぎ立てることもできませんので、溜息をつきながら控えています。姫君も、たいそう恐ろしく、どうなることかとわなないておいでなされて、美しいおん肌つきも、寒そうに縮毛だっていらっしゃるお可愛らしさに、君は単衣だけをお着せなされて、押しつつんでお上げになりましたが、そういう御自分も、いくらか変にお感じになりながら、しんみりとおん物語をなすって、「是非私の所へいらっしゃいよ。おもしろい絵などもたくさんありますし、難遊びしますからね」と、気に入りそうなことをおっしゃって上げる御様子の、たいそうやさしそうなのを、幼な心にもそう一途には恐がらず、とはいえさすがに寝入りもしないで、気味悪そうに、もじもじしながら横になっていらっしゃいます。

このように、「です、ます」体だけを使うことによって、女性の語り手が私たち読者に直接、語りかけている雰囲気醸し出しています。流動する叙述体もよく表わされています。しかし、谷崎の訳は古文の原文に近すぎるために、かえって今の若い読者には読みにくいと言われているそうです。日本語の場合にも、原文の叙述体を忠実に訳せば読みにくくなるということが興味深いと思います。また、四人の現代語訳のうち、叙述体の女性的な面を一番出そうとしている訳者は男性であることも興味深いことです。

次に円地文子氏の訳を見てみましょう。

円地文子「源氏物語一」新潮社、昭和47年、296頁

とおっしゃって、いかにも物馴れた様子で、御帳台の中へ姫君を抱いてお入りになったので、怪しからぬこと、源氏の君ほどのお方が思いのほかなお振舞と呆れはてて、誰も誰も顔を見合せるばかりであった。乳母は心も心ならず、御無体などは思うものの、荒々しく騒ぎ立てるわけにもいかないので、溜息をつくばかりである。

姫君はすっかり怯えて、どうなることかと慄えていらっしやるので、まことに美しいお肌つきも粟立って寒げにお見えになる。君はいとしく思召して、肌着の単衣だけでおくるみになってお添い臥しになりながら、御自分のお心にも、何となく妙に落ち着かぬ思いがなさらぬでもないが、あわれ深くお話しになるのだった。

「ね、私のところへいらっしやい。あなたのお気に召すような面白い絵などもたくさんあるし、雛遊びもいくらも出来ますよ」

などと、お気に入りそうなことをおっしゃる御様子がものやさしく親しみ深いので、いとけないお心にも、そうそうは怖いとお思いにならず、そうかといって何となく落ちつけないで寝入りもなされないままに、身動きばかりしつづけていらした。

円地氏の地の文の訳し方において独特な点は、文章の中に敬語を使って、文章の結びを「である」「た」の形にしていることです。これにより、いわゆる「硬い文章体」になります。このように現代小説の標準的な叙述体を保ちながら原文の雰囲気を表わそうとしています。しかし、女房たちの描写を「である」と結ぶのは、語り手と女房たちの親密な関係が断ち切られてしまうのではないのでしょうか。また、原文では、一つの文章の中に「肌つき」で表わされている幼女の恐怖と、それを見て源氏が愛しく思う気持ちが流動的につながっていくところが、円地訳では二つの文章に分断されてしまっています。さらに、「姫君は」に対して「君は」を置いており、すなわち「・・は・・は」の構造を用

いることによって、二人の人物の気持ちの対照を強調しています。しかし、原文においては、幼女と男性の心理的な対照を描いているだけではなく、「肌」という境界線で幼女と男性が心理的にあやうくつながっていることも表わされていると思います。しかしまた、円地氏は「お添い臥し」という表現を加えることでこの場面のきわどさを表わしているようにも思えます。

最後に最近新しく出版された瀬戸内寂聴氏の訳は、四つの現代語訳の中では最もわかりやすい源氏物語の訳だと思われまます。

### 瀬戸内寂聴「源氏物語一」講談社、1996年、246頁

と命じられて、さも馴れ馴れしく御帳台の中にお入りになられましたので、

「まあ、とんでもない、思いもよらぬことをなさるもの」

と、女房たちは呆れはて、誰も彼もお側に控えております。

乳母の少納言も動転して気を揉んでおりますけれど、事を荒だてて騒ぎ立てるのも憚られますので、困りきって溜め息をつきながら、そこに控えております。

姫君はたいそう恐ろしくて、どうなることかと怯えてわなわな震えていらっしゃいます。清らかな美しいお肌も、ぞっと鳥肌立てていかにも怖そうにしていらっしゃるのが、源氏の君にはこの上なく可愛く思われて、肌着の単衣だけをお着せになり、くるみこんで抱いておあげになります。我ながらそんな御自身の振舞いもどうかしているとお思いになられるのでした。やさしく姫君にお話しかけになって、

「ね、わたしのうちにいらっしゃいよ。おもしろい絵などもたくさんあるし、お人形遊びもしましよよ」

と、姫君の気に入りそうな話をなさり御機嫌をとっていらっしゃる源氏の君の御様子が、たいそうやさしそうなので、姫君は幼心にも、それほど

ひどくは怯えず、それでもさすがに何となく気持ちが落ち着かず、安心して眠れないので、もじもじ身じろぎばかりなさりながら、横になっていらっしゃいます。

このように、おばあさんが若者に昔の話しを語っているような調子です。若紫の恐怖と源氏の恋慕を描く長い文章が瀬戸内訳では三つの文章に分けられているにもかかわらず、大事な所を切らず、したがって文章の流れがうまく一つに保たれていて、叙述体の流動性を表わすことに成功しているといえましょう。

ここまで、四つの現代日本語訳の同じ引用箇所における敬語の使い方の効果と、「肌つき」への言及の扱い方を見てきましたが、これからそれぞれの引用箇所全体の訳に対する総合的な印象について少し触れたいと思います。どの訳にも、この箇所の原文が醸し出している、この場面でのきわどさが表現されていると思います。興味深いことの一つは、これらすべての現代語訳はウェリー氏の訳と同じように、幼女と大人の男性との身体の接触を暗示していることです。たとえば、原文には無い「抱く」や「添い臥す」という動詞を使っていることから、それは明らかでしょう。このことは、先に述べたように、サイデンステッカー氏の訳では省略されてしまっているので、その意味においては、ウェリー氏の訳の方が源氏物語の原文の雰囲気をよく伝えていると言えないでしょうか。

1925年にイギリスの現代女流作家ヴァージニア・ウルフが雑誌「ヴォーグ」に、ウェリー氏が英訳した源氏物語の書評を書きました。まだ全訳が完了する前でしたので、ウルフが読んで書評の対象としたのは、最初の九卷すなわち桐壺巻から葵巻までの英訳を一冊にまとめて刊行したものでした。ウルフはこの一冊を通して見える源氏物語という作品を大体は褒めながらも、書評の最後には次のような評価を下しています。

Virginia Woolf “The Tale of Genji : The first Volume of Arthur Waley’s Translation of a Great Japanese Novel by the Lady Murasaki”, Vogue Magazine (London Edition) 1925.

No; Lady Murasaki is not going to prove herself the peer of Tolstoi and Cervantes or those other great storytellers of the Western world. Some element of horror, of terror, of sordidity, some root of experience has been removed from the Eastern world so that crudeness is impossible and coarseness is out of the question, but with it too has gone some vigor, some richness, some maturity of the human spirit failing which the gold is silvered and the wine mixed with water.

いや、紫式部は、トルストイやセルヴァンテスなどのような西欧の世界の偉大な語り手と肩を並べる同志となることは決してありえないでしょう…この東洋の世界からは、恐ろしいもの、非道なもの、浅ましいものといった種類の要素が、即ち人間の経験の根源が抜き取られてしまっています。なぜならば、そこには野卑や無粋は存在しえないからです。しかし、それとともに、人間の精神の活力や豊かさや熟成も失われてしまうのです——あたかも金に銀メッキがほどこされてしまうごとくに、ワインに水が混ぜられてしまうごとくに。

私にはこのウルフの意見に同意することができません。源氏物語という、優雅に、華やかに、また、おっとりと言われる物語の裏には人間のもつ暗く、まがまがしい情熱や欲望が存在しています。それ故にこそ、千年も読み継がれ、傑作と言われるのでしょう。この発表で取り上げた箇所にも、そのような欲望や情熱が見られることは、これまでに述べてきた通りです。したがってそのような源氏物語の本質をみごとに描き出してくれている故に、アーサー・ウェリ



一氏の英訳は、少なくとも、この発表で取り上げた箇所についていえば、訳者の犯した間違い、即ち誤訳がかえって原作のもつものを忠実に伝えてくれているのではないかと思います。ちなみに、ウルフのような鋭い作家が、なぜ、源氏物語がもつ、そのような要素を読み取れなかったのかは不思議と言えば不思議ですが、あるいは、ウルフといえどもこれが東洋の物語であるという先入観を捨て切れなかったせいかもしれませんし、あるいはまた、この物語の全訳を読み通していたならば、また別の評価を下したかもしれません。

源氏物語を読む度に、この作品のもつ叙述体の複雑さに感じます。この発表では、この叙述体を翻訳する際の困難な問題の、ほんの一端に手を触れただけという気持ちがあります。しかし、この氷山の一角に触れたことから、今後は少しずつ、この問題に取り組んで行きたいと思います。

#### \* 討議要旨

Scott SPEARS氏は、源氏物語の主題をどう捉えるかということと翻訳の姿勢とが関係するのではないか、と質問し、発表者は明るさと暗さという相反するものの組合せ、女性たち（読者である女房たち）の苦しみ、といったものが重要なテーマになっており、ここで取りあげた場面にもそれが反映している、と述べた。

篠塚純子氏は発表者の日本語原稿にアドバイスを与えた者として、内容の要点を説明した上で、人間の内面の複雑さを描いている作品であるから、それを表現した翻訳がよいのではないかと指摘し、発表者も同意した。

福田秀一氏は、サイデンステッカーが翻訳の際、ジェーン・オースティンの文体を模倣しようとして挫折した、と述べている、また、ロシア語訳の訳者は、母国の古い女性作家の文体を手本にしたというが、谷崎の文体や今回の発表と関連させて考えると興味深い、と指摘し、発表者は、オースティンは確かに自立した女性作家であり、ウィットがある点で紫式部と共通するであろうが、なるほどサイデンステッカーの文体は、一文が短く、わかりやすくなっていて、彼女とはかなり異なっている、なお、現代フランスの女性作家で一部の前衛的な人は、女性特有の文体として時制の曖昧なものを目指していて、源氏と似ているのが面白い、と答えた。

John T. WIXTED氏は、中国語・フランス語・ドイツ語の翻訳についても視野を広げて同じような検討をすれば面白いのではないかと指摘し、発表者は、フランス語訳には「肌」が出てくることは確認した、と答えた。

西原大輔氏は、今回の発表において指摘した、ウェイリー訳の情熱的・人間的な光源氏像が、ウルフにはなぜ伝わらなかったのか、これは当時の西洋におけるアジア観（オリエンタリズム）がそうさせているのではないかと指摘し、発表者も同意した上で、ウルフの書評は初めの9巻のみを対象としており、全巻読んだら違う感想を持ったかもしれない、と述べた。

前島志保氏は、心内語と地の文を行き来する日本の古典文学の流動的な文体は英語にどのように訳

されうるのか、似たような文体が英語に存在するのか、と質問し、発表者はジョイスやウルフの「意識の流れ」の文体に近いが、翻訳にそれを利用すると一般の読者がついてこれないだろう、と答えた。